

第25回

品川区中学生の主張大会文集

品川区青少年対策地区委員会連合会





(発表者・司会者・前回大会最優秀賞受賞者・地区委員会連合会役員・審査員)

日時：令和7年12月13日（土）13時

場所：きゅりあん 小ホール

主催：品川区青少年対策地区委員会連合会

後援：品川区

協賛：品川区教育委員会

品川区立中学校長会

品川区立義務教育学校長会

品川区立中学校 PTA 連合会

〔表紙・裏表紙 伊藤学園 7年 ^{こじま}小島 あかり さんの作品〕

はじめに

「品川区中学生の主張大会」は、中学生が日ごろ考えていることを多くの人の前で発表することにより、自立心や社会性を育てること、また、地域で青少年に関わる皆様が中学生への理解を深める機会とすることを目的に、平成十二年から開催しております。今年度も、皆さまのご理解ご協力に支えられ、第二十五回大会を迎えることができました。改めて、学校関係の皆様や各関係機関の皆様には厚く御礼申し上げます。

本大会では、戦争や障害に関すること、コミュニケーションに関すること、勉強をテーマにしたものなど、様々な発表がございました。中学生一人ひとりが地域や家庭、学校での日常生活を通して経験したことや感じたことなどを、自分の言葉で精一杯伝えてくれました。中学生の皆さんは、先生やご家族に支えられながら練習を重ねてこられたことと思います。是非この体験を大切にしてください、今後に活かしてほしいと願っております。

地域で活躍されている皆様におかれましても、この文集を中学生の心の一端を知る手段としてご活用いただき、今後の青少年の健全育成のための参考としていただければありがたく存じます。

近年、地域コミュニティのつながりが希薄化する一方で、オンラインを通じたやりとりが増加しています。このように、コミュニケーションの取り方が大きく変化し、異なる形のコミュニケーション環境の中で、子どもたちは多様な経験を積むこととなります。こうした状況の中、私たち地域の大人たちは、技術や情報だけでなく人と人とのつながりの本質を教える責任があると感じております。

品川区青少年対策地区委員会では、関係機関の協力を得ながら、区内の各地域において、小・中学生が参加できる事業をはじめ、幅広い年代の方たちと交流できるよう、様々な活動を進めております。今後も青少年が健やかに成長できるよう学校、地域、家庭と更なる連携を深め、活動を推進してまいりますので、ご理解ご協力を宜しくお願いいたします。

最後に、この大会を開催するにあたりご協力いただきました審査員の方々、また、学校関係の方々には御礼を申し上げます。

品川区青少年対策地区委員会連合会会長代行

根岸 輝行

平林 繁雄

目次

発表のテーマは自由。ただし、社会の一員として地域や学校のなかで、日常生活を通して経験したことや、さまざまな活動を通して感じたこと、意見などをまとめたものとする。

最優秀賞

見えないバリアを超えていく

荏原第一中学校 九年

桑谷小春…………… 1

優秀賞

I LOVE JAPANESE TOILETS !!

豊葉の杜学園 九年

柳田和花奈…………… 3

優秀賞

祖父が教えてくれたこと

荏原第五中学校 八年

高橋愛理…………… 5

優秀賞

変化

伊藤学園 八年

市川幸之介…………… 7

審査員特別賞

戦争とスポーツ

富士見台中学校 八年

上西園彩咲…………… 9

奨励賞

- 品川区の支援制度と物を大切にすること
- フェイクニュースを見極める
- 私が大切にしているもの
- 手話が教えてくれた大切なこと
- 「才能」の裏に隠された「努力」
- 大空をはばたくカブトムシのように
- 優しい世界
- 平和な世の中にするために
- 勉強するところについて
- 「法」と「倫理」の狭間で

講評

審査員長（元東邦音楽大学特任准教授）

伊藤 藤	伊藤 藤	戸越台中学校	八年	品川区の支援制度と物を大切にすること
中 間	中 間	東海中学校	八年	フェイクニュースを見極める
白石 枝真	白石 枝真	荏原第六中学校	九年	私が大切にしているもの
松田 琴恋	松田 琴恋	鈴ヶ森中学校	九年	手話が教えてくれた大切なこと
菊地 はな	菊地 はな	八潮学園	八年	「才能」の裏に隠された「努力」
河村 理莉子	河村 理莉子	日野学園	九年	大空をはばたくカブトムシのように
田中 美春	田中 美春	荏原平塚学園	九年	優しい世界
井土 萌音	井土 萌音	大崎中学校	八年	平和な世の中にするために
藤村 和	藤村 和	品川学園	九年	勉強するところについて
坪内 彩華	坪内 彩華	浜川中学校	九年	「法」と「倫理」の狭間で
江森 利公	江森 利公			
31	31			
29	29			
27	27			
25	25			
23	23			
21	21			
19	19			
17	17			
15	15			
13	13			
11	11			

最優秀賞

見えないバリアを超えていく



荏原第一地区

荏原第一中学校

九年

桑谷小春

私たちの間には、時々「見えないバリア」があります。それは、知らないことから生まれる心の壁です。私は、そのバリアに真正面からぶつかったことがあります。

あの日、駅で白杖を持った人が、停めてあった自転車の前で立ち止まっていました。困っている、そう分かったのに、私は動けませんでした。声をかけることができなかつたのです。後ろから来た人が声をかけたのを見てほっとしましたが、同時にとても恥ずかしくなりました。もし声のかけ方を知っていたら、迷わず行動できたかもしれない、そう思いました。

家に帰ってからどうすればよかったのか母に聞くと「短くたずね答えを待つのがいい」と教えてもらいました。お手伝いできますか、どうしたら安心ですか、と聞

いて相手のペースを尊重する。これなら私にもできます。私に必要なのは勇氣よりも知識だったので。この出来事が、「事前に知ることの大切さ」を実感するきっかけになりました。

私の母は、特例子会社とって法律に基づき障がいのある人が働きやすいように作られた会社で働いています。職場では一人ひとりが得意を活かして働いているそうです。「できる・できない」よりも「その人の得意をどう活かすか」が大切だといいます。

一方、私の周りには障がいのある人がいません。関わる機会もなく、学校で学ぶ機会も限られています。授業でブラインドサッカーを体験したことがあります。アイマスクをして音のなるボールを追いかける。確かに「見えない」不便さを実感できる、貴重な経験でした。しかし、それだけでは、障がいのある人とどう接するのか、どう関わるかまではわかりませんでした。

皆さんは、学校や職場などで障がいのある人と出会ったら、自信を持って関われる準備ができていますか。私はすぐに答えられません。だからこそ、体験だけでなく、関わり方や配慮の方法について学ぶ機会を、学校教育にもっと取り入れるべきだと思うのです。たとえば、支援員の方の話を聞く。ユニバーサルデザインをテーマに校内マップを作る。こうした活動なら、特別視せず理解を

深めることができるはずですが。

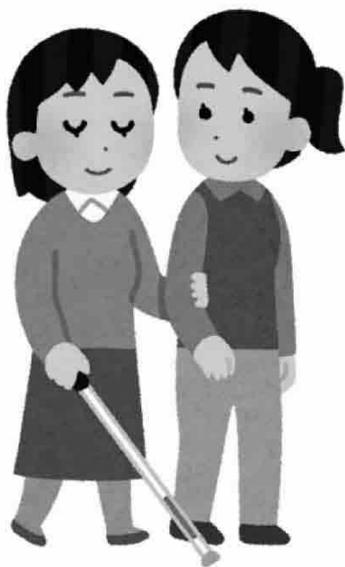
もちろん、「無理に関わりなくてもいい」という意見もあるかもしれませんが。しかし、私が言う「関わり」とは、無理に距離を縮めることではありません。自然に協力したり、交流の場を作ったりすることです。知識や経験を重ねれば、不安は小さくできます。その学びは、将来、多様な人と出会うときに役立ちます。それは言葉ひとつ取ってもそうです。「障がい者」よりも「障がいのある人」と言う方がいいと母から教わりました。障がいはその人の一部であって、全部ではないからです。適切な言葉を知ることが、相手を大切にする第一歩です。障がいには、外見で分かるものもあれば、見ただけでは分からないものもあります。生まれつきの場合もあれば、事故や病気で突然当事者になることもあります。

明日は我が身です。だからこそ、知識や経験を早いうちを持つておくことが必要なのです。

「障がいがあるうがなろうが、支え合える社会がいい。それには知らないことでできてしまう心の壁を超える力が必要だ」と母は言います。私はこの言葉を自分の目指す姿として胸に刻みたいと思います。そして、様々な人との関わり方を学ぶ機会の大切さを、皆さんに伝えたいと思います。

私はこれから、正しい言葉や接し方を学んでいきます。

障がいのある人に対しても、そうでない人に対しても、相手を尊重し、自然に協力できる場を増やしていきたいです。知らないまままで距離を広げるのではなく、先に知って一歩近づく。その積み重ねが、互いに支え合える社会への一歩になると、私は信じています。



優秀賞

I LOVE JAPANESE TOILETS !!



荏原第五地区

豊葉の杜学園

九年

柳田 和花奈

皆さん、「日本が世界に誇れるもの」と聞いて何を思い浮かべますか。富士山、アニメ、どれも素晴らしいですが、私は声を大にして言いたい。「トイレ」です。トイレが誇り？と驚くかもしれませんが、本気です。日本のトイレはまさにテクノロジーとおもてなしの結晶。ウォッシュレットに水の音が流れるセンサー、便座の温かさ。冬の朝、冷えた体をあの便座がそっと迎えてくれる瞬間、そこはもう用を済ませる場所ではなく、誰もが使う快適な公共空間となっているのです。誰もが安心して使えるように凝らされた数々の工夫に気づくと、感動すら覚えます。これはまさに日本のおもてなしの極みではないでしょうか。

しかし、この快適な空間は日本を一步外に出ると当た

り前ではないのです。語学研修で行ったニュージールランドのトイレで私の目に入ったのは洗面台の上のゴミの山。トイレの鍵は壊れていて閉まらず、紙もない。さらに、ドアの下と上がスカスカで、「これ外から見えていないかな」と不安になってしまっただけでした。

さらに父の海外赴任先のベトナムに行った際に私はある失敗をしてしまいました。トイレトペーパーを流して、トイレを詰まらせてしまったのです。本来なら、流さず、横のゴミ箱に捨てる必要があったのです。さらに公衆トイレは清掃が行き届いておらず、「入るの怖い」と感じる場面もありました。緊急時以外は絶対に避けたい、というのが本音です。

また、インターネットで世界のトイレを調べてみると、びっくりするようなトイレがあります。ドアなし、仕切りなし、が当たり前の公衆トイレ。便座が無かったり、使う際にはお金がかかったりすることもあるそうです。このように、国が違えばトイレ文化も様々。他国の文化を尊重しつつも、やはり私は日本の綺麗で快適なトイレを誇りに思います。日本に生まれて良かったと海外旅行から帰るといつも思うのです。そして、このトイレの素晴らしさは海外の方からも称賛されています。日本に来た観光客は、トイレに入ると、綺麗さにみな驚き、感動するそうです。日本のトイレをまわるトイレツアーに参

加したり、ウォシュレットをお土産にしたりする人も多いのです。

日本のトイレ、本当にすごいですよね。でも、ここで一つ大事なことをお伝えしたいのです。どれだけ高性能なトイレでも、「使う人のマナー」が悪ければ、その価値は台無しです。実際、日本財団の公共トイレ意識調査では、「掃除が行き届いていない」「ゴミが落ちている」といった声も上げられており、課題も残っています。日本の「トイレ綺麗文化」を支えているのは、清掃員さんや自治体の皆さんの努力です。でも、それを保つには、私たち一人ひとりの協力が欠かせません。

毎度トイレ掃除をしてとまでは言いません。ただ、自分の使い方を少し見直してみてください。濡れた手をハンカチを使わずに払う。落ちた紙くずを見て見ぬふりをする。思い当たる節、ありませんか。ちよつとだけだから、それが積み重なるとトイレがどんどん汚れてしまいます。まさに「塵も積もれば山となる」です。しかし、私はネガティブな行動ではなく、ポジティブな行動を積み上げ、日本の素晴らしい文化を守りたいのです。

私達自身が思いやりの心でトイレを丁寧に使うことで、次に使う人が気持ちよく使える。これを全ての人が実践することで、清潔な空間が保たれるようになり、結果的に自分も心地よく使えるようになります。

日本のトイレは私たちの誇り。でも、それを未来にも誇れる文化として残すには、「使い方」こそがカギです。皆さんも、今日から「ちよつと丁寧なトイレの使い方」始めてみませんか。日本の「トイレ綺麗文化」みんなで守っていきましょう！



優秀賞

祖父が教えてくれたこと

荏原第四地区

荏原第五中学校

八年

高橋愛理



今年一月、祖父が亡くなった。七六歳だった。頭の中に腫瘍ができ、その腫瘍が大きくなり、脳を圧迫してしまふ病気で、何年も辛い闘病生活を送っていた。ここ数年は、入退院を繰り返していて、遠くへ出かけた記憶は少ないが、祖父が病気になる前は、一緒に様々なところへ出かけて、たくさん可愛がってもらった。

祖父は、七人兄弟の末っ子で貧しく、子供の頃からみかんの箱の上で一人夜遅くまで勉強している子だったという。兄弟がたくさんいる中、勉強を頑張ったので、ただ一人大学に進学し、大阪大学を卒業して自動車部品のエンジニアとなり、定年まで勤めた。特に数学が得意で、私が小学校の頃は塾の算数の宿題をよく見てくれた。いつも優しく、「まず図を描いて考えると良い」と丁寧に

教えてくれた。

大阪に住む私の三歳年下の双子の従妹たちの面倒もよく見てくれていた。小児科に双子を祖父が連れて行ったときに、

「体重何キロですか？」

と聞かれ、五歳くらいで十五キロ以上はあろうかというのに

「七、八キロやと思います。」

と答えて看護師さんに

「そんなはずはありません。」

と言われたという天然エピソードもある。私は父に病院へ連れて行ってもらったことがないので、孫を病院に連れて行ってくれるおじいちゃんは素敵だと思った。

私が小学一年生のときに、母が一週間入院したとき、急なことだったので、母の両親や祖母が来ることができず、祖父が大阪から一人で来て、泊まり込みで私と妹の世話をしてくれた。毎日ご飯を作り、母の病院まで私たちを連れてお見舞いに行ってくれた。そのとき三歳の妹は四日間歯磨きをしなかつたけれど、祖父がカラーライスを作ってくれたことを鮮明に覚えている。

祖父の葬儀のときに、私は祖父が亡くなったことが、頭では分かっているけど、実感がわいてこなかった。出棺のときに、祖父が元気だったころの思い出が急によみが

えつてきて、涙があふれてきた。周りの人もみな泣いていた。

祖父が、祖母や父と兄妹、五人の孫に囲まれて、旅行に行った写真などが映し出されたとき、祖父の年の離れたお姉さんが、

「和夫ちゃんは幸せな人生やったね。」

と言ってくれた。私は、亡くなる前身体が思うように動かず、辛そうな祖父を見て、かわいそうだと思っていた。しかし、祖父の人生は、病気で辛いこともあったと思うが、子供の頃から勉強を頑張り、仕事も一生懸命勤めあげ、家族を大切に、孫たちにたくさんのお話を教え、与えることで、多くの人から愛された。豊かな素晴らしい人生だったのだとわかった。

私は、初めて身近な人が亡くなる経験をした。そして、祖父が私にたくさん与えてくれたことについて考えた。祖父は、自分が努力して身に付けた知識や、努力して稼いだお金を惜しみなく私たちに与えてくれた。困ったときは、大阪から飛んで来て助けてくれた。私も祖父のように「誰かに何かを与えられる人」になりたいと思った。普段毎日をご一緒していると、つい「自分さえよければ」と考えてしまうことがある。そんなときは、祖父のことを思い出して、「誰かのために自分ができること」を、一度立ち止まって考えて行動したいと思う。



優秀賞

変化

大井第二地区

伊藤学園

八年

市川幸之介



最近、世の中は急速に変化しています。数年前には新型コロナウイルスが蔓延し、それまでの常識は崩れ、それぞれがそれぞれのやり方で、新たな生活に適応しようとしてきました。他にも、多様性の時代と言われ、様々な物事に多方面への配慮が必要になり、より慎重に物事を進める必要が出てきました。スマートフォンやパソコンなどの電子機器も一気に普及しました。これにより、誰もがいつでもどこでも、膨大な情報にアクセスすることが可能になり、もはや我々が電子機器なしで生活することは不可能なのではないかというほどまでになっています。

このように今、世界はどんどん変化しているのです。ところでみなさん。変化することは怖いですか？嫌い

ですか？私は正直に言えば「変化」が怖いです。変化すれば、これまで通用していたことは通用しなくなり、またすべてゼロからのスタートになってしまう。そんな気がして怖いのです。しかし、生きていけば、いつか「変化」はやってきます。自分から迎えに行く場合もあるかもしれませんが。実際私にも「変化」は訪れました。ところが、「変化」してみると、意外に大したことではなかったり、むしろ「変化」してよかった。というようなこともありました。少しその話をしたいと思います。

一つ目は、私が五歳になる年、九年ほど前のことです。私はそのころは普通の幼稚園生として生活していました。しかし、それは突然変わります。親の仕事の都合で海外で生活することになったのです。私は最初大反対しました。日本には仲の良い人も何人かいましたし、なにより海外になど行ったこともないのに、そこに住むなんて、考えられません。しかし、家族と別れて暮らす方が考えられません。私は最終的に同意し、日本を離れました。ところが、行ってみれば思っていたよりも楽しく過ごすことができました。英語もほんの少しずつですが身につけることができました。そこには二年ほどしかいなかったもので、今でははっきりした記憶もあまりありませんが、非常に良い経験だったと思います。

二つ目は、私が六年生のころ、二年ほど前のことです。

私の学校は義務教育学校なので、五年生の時から中学生に混ざって行う委員会活動がありました。ただ、私は五年生の時には委員会には所属しませんでした。よく分からないし、大変そうという気持ちがあったのです。しかし、同級生の話を聞いてみると、実は委員会は面白いのかもしれないという気がしてきました。特に、選挙管理委員会は私の興味を強く引きました。六年生になり、私は迷いました。選挙管理委員会は実に面白そうではあるが、周りのやりたいと言っている人は全員経験者だし、手を挙げたところでなれないのではないか。ならば黙っていた方が良いのではないかと。しかし、結局私は手を挙げ、何とも運の良いことに選挙管理委員になることができましたのです。そこで私は選挙管理委員会の魅力に気づき、今では毎年所属しています。

はつきりと言ってしまうと、おそらく、「変化」しない方が断然楽です。何も変わらず、いつも通り過ごす。挑戦がないので失敗もない。なんと楽なことでしょう。しかし「楽」ではありませんが「楽しく」はないのではないのでしょうか。私は先に挙げた二つの事例のように「変化」し、非常に良い経験をしたり、毎年の楽しみを見つけられたりしました。ただ、私もまだ「変化」は怖いのです。しかし、それでも少しずつ「変化」する姿勢をとり、どんどん新しい自分を生み出し、そして人生を、精一杯

楽しみたいと思います。



審査員特別賞

戦争とスポーツ

大井第三地区

富士見台中学校

八年

上西園 かみにしごの

彩 さ
咲 き



みなさんは戦争を「身近」に感じたことはありませんか。調べてみると戦争とは、「政治的な目的を達成するために、国家などの集団間で軍事力を用いて行われる組織的な武力闘争のこと」とありました。テレビで見たことのある、飛行機から爆弾をばらまいている場面や、崩壊した建物や火の中を苦しみながら逃げている人々の姿を想像するだけで胸が苦しくなります。

ロシアのウクライナ侵攻やイスラエルとイランの紛争は記憶に新しいところだと思いますが、それが原因で国際的なスポーツ大会への出場が禁止されている国、選手がいることを私は新体操というスポーツを通じて知ることになりました。

私は小学生のころから新体操をやっているベラルーシ

に好きな選手がいます。また、芸術的にも技術的にも世界トップレベルのロシアの選手は全世界の新体操選手の憧れでもありました。その両国の選手がある時から突然国際大会で姿を見ることがなくなりました。制裁を受けていたのです。最初は理解に苦しみましたが、国際情勢を少しずつ考えたり、テレビなどのニュースで知っていくうちになぜ試合に出ていないのかわかるようになりました。自身のケガや体調不良によって欠場することがあっても、国と国との喧嘩によって選手が制裁を受けることがあっていいのかと考えさせられました。

また、制裁を受けていなくても苦しんでいる選手がいました。ウクライナの選手です。国際大会では優勝するくらいの素晴らしい演技をしても、優勝スピーチでは泣きながら世界平和を願っていました。優勝したら嬉しいはずなのに、たくさん泣いていました。そして、優勝した喜びよりも母国の平和と戦争の終息を願ってスピーチを終えました。会場の誰もが、胸を詰まらせ同じように泣いていました。私は戦争のない日本に生まれ、恵まれた環境に慣れてしまったことにとっても申し訳ない気持ちになりました。戦争の中、国際大会に出場する姿は、悲しみや苦しさを抱えながらも美を表現できる真の強さと、戦地に向かった家族と一緒に自分も戦っているんだと言っているように見え、強い覚悟に満ちあふれています。

した。

ブルガリアでの世界選手権からの帰り道でも、戦争が起きている現実を目の当たりにする機会がありました。中東ドバイを経由して帰国する際に、イスラエルとイランの紛争の影響で、「飛行機が欠航となるかもしれない」というものでした。私は、日本へ帰れなくなってしまったことへの不安と、近くで紛争が起きていることへの恐怖を感じました。飛行機が運航することが分かってても、「テロの標的になったらどうしよう」とか、「無事に日本へ帰れるのか」と不安になって、こんなにも身近で戦争を感じたことは初めてでした。

今も世界のどこかで戦争が起きています。世界の国々が政治的対立、宗教的問題、経済的格差などを解決し、国際的な協力をすることで、いつか戦争のなくなる日は来るかもしれません。ですが、私が今できることは「戦争が起きていること」を知り、しっかり理解することだと思います。今の自分の置かれた環境にも感謝の気持ちを持たず、「自分が出来ること」を考えながら毎日を過ごしていきたいです。



奨励賞

品川区の支援制度と物を大切にすること

荏原第三地区

戸越台中学校

八年

伊藤 藤 ころ



皆さんは品川区が好きですか。私は大好きです。子どもや家庭を助ける取り組みがとても多いと感じています。母からも、「品川区は他の地域と比べても子育てや支援の制度が充実しているから助かる」と聞いています。

例えば、医療費が十八歳まで無料であること。これは、体調を崩しても安心して病院に行けるので、とてもありがたいことだと思います。また、給食費や学用品が無償化したことで保護者の負担も少なくなりました。さらに来年度からは、公立中学校の標準服や、修学旅行費も無償化されると聞き、品川区の大きな取り組みに驚いています。

しかし、同時に私は「なんでも無償化されれば良い」というわけではないとも思っています。なぜなら、無料

だからこそ起きてしまう問題もあるのではないかと思うからです。例えば、兄弟などのおさがりの学用品がまだ使えるのに、「新品をただでもらえるから」といって新しいものを受け取ってしまうことはないでしょうか。その結果、まだ使えるものがゴミになってしまいます。それはとてももったいないことだし、物を大切にしようという気持ちも薄くなってしまうと思います。私自身も、兄からリコーダーをおさがりでもらい使っていました。また、弟は、もともと兄が使っていたランドセルを受け継いで使っています。どちらもまだきれいで十分に使えるものであり、わざわざ新品を買ってもらう必要はなかったからです。

一方、去年から夏休みに子ども達に向けたお米の支給があったそうです。お米は、もらったからといってすでにあるものが捨てられてしまうものではないし、まいにちたべるものとして消費されていくので、少しも無駄にはならない支援だと言えます。特に、今年のように、お米の価格が高騰している今、ありがたい施策と言えるでしょう。では、どうすれば「支援」と「物を大切にすること」を両立できるのでしょうか。私は二つの方法を考えました。

まず一つ目は、消耗品の部分だけを無料にするという方法です。例えば、絵具セットなら絵具だけを無料にし

て、ケースやパレットなどは自分で買う。リコーダーや裁縫セットも同じで、糸は支給、ハサミやメジャーなど、まだ使えるものがあれば新しいものをもらわなくてもすむようにすれば、無駄が減ると思います。また、来年度から始まるという標準服の無償化は、ブレザーやスカート、ズボンのみが対象でシャツや体育着などは含まれないそうです。ブレザーやズボンはおさがりでも十分に使えるものなので、兄弟などのおさがりがもらえる人は、むしろ、消耗しやすいシャツや上履きなどにその費用を回せるようにすれば、無駄を減らす事ができるのではないのでしょうか。

二つ目は、必要のないものをもらわなかった家庭にポイントを上げる方法です。そのポイントを使って他の文具を変えるようにすれば、「あるものは大切に使う」という気持ちが自然に育つし、その結果、ゴミを減らす事にもつながると思うからです。

無料で支援をしてもらえる制度は本当にありがたいことです。しかし、それをどう受け止めるかは私たち一人一人の考えや行動にかかっています。これから品川区が「支援」と「環境にやさしい工夫」の両方を大事にした制度を作ってくれたら、私たち中学生も「物を大切にしよう」という気持ちを自然にもてると思います。その気持ちは大人になっても役立つはずです。私は、安心して

暮らせる支援と、物を大切にできる心の両方を大切にできる町こそが、未来の品川区の姿であってほしいと思っています。

品川区の皆さん、学校、家庭、そして私たち中学生の一人一人が力を合わせて、ご飯が食べられない人がいない世界、皆が楽しく学校に行ける世界を作っていきましょう。私たちの未来を共に考え共有していきましょう。



奨励賞

フェイクニュースを見極める

品川第二地区

東海中学校

八年

中^{なか}間^まありさ



皆さんは、たったひとつの嘘の情報が、日本中の人の行動を変えてしまったことを知っていますか？ほんの数の文章が街からトイレットペーパーを消したのです。こうした出来事が起きてしまう背景には、私たちが日常的に触れているインターネットの情報があります。

最近、SNSやネットニュースを見ると、私たちの目に飛び込んでくる情報は昔よりもはるかに増えたと感じます。しかしその中には正しそうに見えて、実は誤ったフェイクニュースも紛れ込んでいます。今日は、この身近に潜むフェイクニュースとその影響について考えてみたいと思います。まずフェイクニュースがどれほど身近にあるのかを見てみます。コロナ禍に二十六度のお湯を飲めば感染を予防できる、メタノールを飲めば治

る、といった根拠のない情報がSNSで急速に広まりました。これは日本だけでなく、世界中で起きた現象です。さらに日本では、トイレットペーパーが不足するというデマが広がりました。経済産業省はすぐには不足しないと否定しましたが、それでも多くの人が不安になり、買い占めによって本当に店頭から商品が消える結果となりました。

ここでわかることは、その情報を信じていない人でさえ周りの行動に影響されてしまうということです。つまり、フェイクニュースは本当かどうかだけでなく、人の心理に与える影響で広がってしまうのです。また二〇一六年の熊本地震の際には、動物園からライオンが逃げたという嘘の情報がSNSで拡散されました。地域の人々は不安になり、動物園には問い合わせが殺到し、大きな混乱を引き起こしました。しかし、これは投稿者のちよつとした悪ふざけに過ぎませんでした。

このように、一つの嘘の情報が実際の行動や社会の混乱へとつながってしまうことがあります。実は私もフェイクニュースの怖さを身近な経験から学んだことがあります。小学生の頃、その日の昼休みのクラブ活動が中止になったらしいと友達から聞き、私はそれをそのまま信じてしまいました。確かめもせず、他の友達や先生にも伝えてしまい、その日は何も知らないまま家に帰りまし

た。真実を知ったのは翌日の朝で、クラブ活動が通常通り行われていたということをそこで初めて知り、とても恥ずかしい思いをしました。この経験から、私は確かめていないことを広めない、出所がわからない情報を安易に信じないことの大切さを知りました。アメリカの研究では、フェイクニュースは本当のニュースよりも拡散スピードが速いことがわかっています。十万件以上の投稿を分析した結果では、真実のニュースが一五〇〇人に届くまでにかかる時間はフェイクニュースの約二倍、さらに嘘のニュースは、真実よりも七十パーセントも多く拡散されやすいという結果も出ています。つまり、私たちが何もしなければ、嘘の情報の方が先に広がってしまうのです。

それを防ぐために、私は次の三つのことがとても重要だと考えています。それは見た情報をすぐに信じないこと、情報の出所を確かめること、自分が広める前に一度立ち止まることです。完璧に見える情報でも間違っていることはあります。だからこそ、一人ひとりの慎重な姿勢がフェイクニュースの拡散を止める力になります。情報の真相を確かめることは少し面倒に感じるかもしれませんが、そのひと手間が社会の混乱を防ぐ大きな力になります。では最後に一つだけ問いかけたことがあります。もしあなたのスマホに、ある情報が届いたと

したら。あなたはそれをそのまま信じますか？それとも一度立ち止まって考えますか？私たち一人ひとりの選択は小さく見えて、実は社会の空気を大きく変える力を持っています。だからこそ、私は正しい情報を見極め、広める責任を持ちたいと思います。そして、一緒にフェイクニュースに揺さぶられない社会を作っていきたいです。



奨励賞

私が大切にするもの

荏原第一地区

荏原第六中学校

九年

白石枝真



最近、「高齢者の孤独死」という言葉をよく耳にする。核家族化が進んだ今の日本だからこそ多い問題だと思う。高齢者が一人暮らしをすることで、生活や健康への不安が増し、必要な支援を受けられなかったり、命さえも失っていくことが、深刻な社会問題となっている。一生懸命生きてきた人生の最期を、一人で迎えるというのはどれほど辛いことだろう。

私の身近にも、そうした孤独の危機を抱える親戚がいる。この春、母の伯母を訪ねた。大伯母は一人暮らしをされていて、認知症が進んでいるが、四人の子どもたちは誰も世話をせず、連絡すらほとんど取っていないと聞いた。そのため、弟である私の祖父が、代わりに一生懸命面倒を見ている。去年はこの大伯母や祖父母と一緒に旅

行に出かけたこともあったのだが、一人暮らしをしていることは知らなかった。「遠くに住んでいるとはいえ、子どもたちにはもう少し気にかけてほしい」と祖父は嘆いていた。何かしらの事情はあるにせよ、四人も子どもがいて、誰も関わらないのかと私も驚いた。

高齢者が安心して暮らしていくためには、制度やお金だけではなく、「誰かとつながっている」という実感が必要ではないだろうか。そのためには、家族や周りの人との関係を絶やさないことが大切だと思う。

そしてこれは、自分のこれからの生き方にも関係している。先日、一〇四歳の高齢の女性のドキュメンタリー映画を観る機会があった。その女性はいろんな人に助けられながらも周りに感謝している姿があった。とても素敵だと思った。私自身、将来高齢になって孤独を感じながら生きる状況にはなりたくない。また、家族にもそんな思いはさせたくない。そのため、人とのつながりを大切にし、社会との関係を保ちながら両親や兄弟、親戚とこれからもお互いに支え合って暮らしていきたい。

また、この夏、私はニュージージーランドで三週間のホームステイを体験した。私のホストファミリーは親子三代で暮らしていて、お互いを自然に助け合っていた。私のホストは八〇歳のグランドマザーだ。新しいことにも前向きに取り組む姿勢が印象的だった。あるとき、グラン

ドマザーが「胸が痛い」と言ったことがあった。そのとき家族全員が気にかけていた。安心したのか、すぐに痛みはなくなったようだ。

もちろん、老後は子どもと同居することが「老人の孤独」を解決する唯一の答えではないと思う。まず大切なのは、「誰かとつながっていたい」という気持ちなのではないだろうか。血のつながりだけでなく、心の距離が近ければ、人は安心して年を重ねられるのではないかと思う。

そして次に大事なことは「新しいことを受け入れる心」だろう。例えば「お年寄りサロン」はとてもいいつながりの場であると思うが、スタッフや他のお年寄りとの関係を作るには、一歩新しい世界に踏み出さなくてはならない。自分が慣れた場所だけに固執しては人とのつながりは広がらないと思う。映画の高齢女性も、新しいことにチャレンジすることが大事だと言っていた。

今年これらの経験を通して、私は改めて祖父の姿を尊敬するようになった。自分も高齢であるにもかかわらず、兄弟を思いやる祖父の行動は、人と人とのつながりの大切さを教えてくれている。つい先日、その大伯母は高齢者施設に入居した。祖父の負担も少し軽くなったようで、私もほっとしている。

私はこれからも、そんな祖父や祖母とのつながりを大

切にしていきたいと思う。そしてどんな年齢になっても、人との関わり、誰かの役に立てるような存在でありたい。そのためにも、これからも身近な人との関係を大切にしながら、自分にできることを探り、行動していきたい。



奨励賞

手話が教えてくれた大切なこと

大井第一地区

鈴ヶ森中学校

九年

松^ま田^だ琴^こ恋^こ



私には、聴覚障がいのある友達がいる。彼女と出会ったのは部活のシード大会だった。試合中の彼女の第一印象は「静かな子」だった。今の私なら、「もしかしたら聞こえないのかな。」と考えられるかもしれない。でも当時の私は、「喋らないイコール静かな子」としか思えなかった。

試合が終わった後、彼女が手話で「ありがとう」と言っていたように見えた。その時、私は初めて彼女が耳が聞こえないことに気がついた。今思えば、それらしいしぐさはしていたかもしれない。でもその時の私は、全く気づかなかった。このことをきっかけに手話に興味を持った。身近に手話を使う人がいなかったこともあり、私は新鮮に感じた。次会えたら手話で話しかけたい、そう

思った。

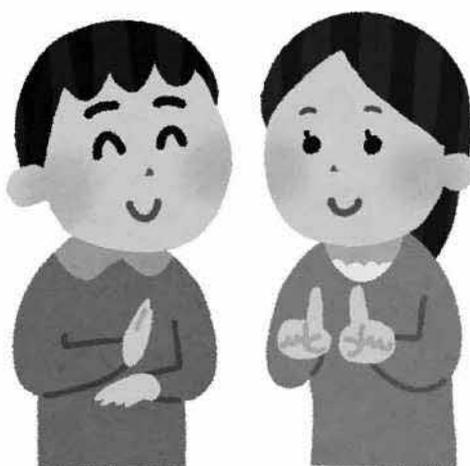
試合が終わって家に帰り、手話について調べてみた。あいさつの仕方、自分の名前の伝え方、お礼の仕方などを学び、母に頼んで図書館から手話の本を取り寄せてもらった。読んでいくうちに三つの疑問がわいてきた。一つ目は「手話って何だろう」、二つ目は「聴覚障がいって何だろう」、三つ目は、「どうやって学校で過ごしているのだろうか」という三つだ。一つ目と二つ目は、説明してみても言われても説明できないので、疑問として出てきた。調べてみると、手話は耳が聞こえない人が手や指、体の動き、表情などを使って気持ちや情報を伝えるための言葉だと分かった。聴覚障がいとは、音を聞くことや感じることに何らかの障がいがあり、言葉や周囲の音が聞こえづらくなる状態のことをいうそうだ。外見からは分かりにくいいため、私のように周囲が気づかないこともあるという。学校では、先生が手話で話したり、板書を工夫したりして、みんなが分かるような工夫がされていることも知った。自分がこれまで知っていたことは、ほんのわずかな知識だったと感じた。

ある日、聴覚障がいのある生徒が通う学校と練習試合をすることが決まった。それを知ってから、私は学校でも家でも少しずつ手話の練習を始めた。手話には言いたいことに関連した動きが多く、「おはよう」は起きるし

ぐさ、「こんばんは」はカーテンを閉める動作になっていて、分かりやすかった。

練習試合当日、私は手話であいさつと自己紹介をした。それ以外の会話はホワイトボードやジェスチャーを使って行った。手話が完璧でなくても、気持ち伝えようとすれば通じるということを実感した。言葉が通じた時笑顔が返ってきたことが嬉しくて忘れられない。

この経験を通して、私は「伝えようとする心」と「知ろうとする努力」の大切さに気づいた。耳が聞こえないということは「できない」のではなく、「伝え方が違う」だけなのだと思った。私はこれからも手話を学び続け、もっと多くの人と心を通わせられるようになりたいと思う。



奨励賞

「才能」の裏に隠された「努力」



八潮地区

八潮学園

八年

菊地はな

「才能がある」という言葉があります。それはほめ言葉です。しかし、言われる人は必ずうれしい気持ちになるのでしょうか。もしかすると言われた相手は、喜ぶどころか悲しんでしまうことがあると考えた経験をお話ししたいと思います。

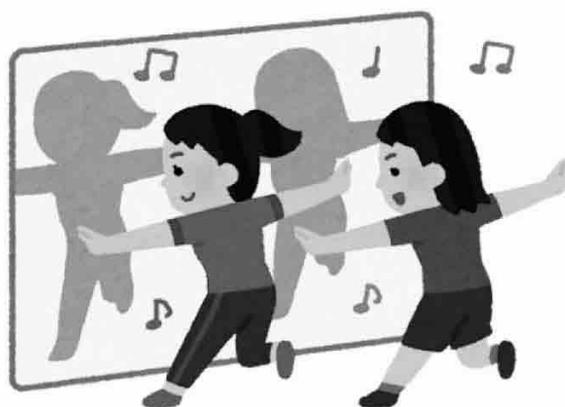
私は一昨年ぐらいまでダンスを習っていました。当時は、才能があるなんて言われたことはなくて、運動も苦手で全然できませんでした。だから、たくさん努力をして、私よりも上手な人に近付こうとしました。それで少しかだけ、ダンスが踊れるようになりました。そしてある時、習い事以外でダンスを踊る機会があった際に、私はある人に言われました。「はなってダンスの才能あるよね。」その時、私はなんだかすごく心がモヤッとしてし

まいました。他の人なら、「才能がある」という言葉に、「私って才能あったんだ。」と安心したり、嬉しく感じたりするのも知れませんが。でも私は、才能なんてない中で努力して積み上げてきたものを、才能があるという一言だけで片付けられてしまった気がして、とても嫌な気持ちになってしまいました。

五年生でフルートを始めたばかりの頃、先生に「才能あるね。」と言われて、とても嬉しかったし、この楽器をもっと上手に吹けるようになりたいと思いました。でも始めて四年目の今、同じように、他の人から、「才能があつていいね。」と言われたらきつと少し嫌な気持ちになると思います。

どうして、ダンスの時は嫌だと思ったのにフルートを始めてすぐの時は嬉しかったのか。それはきつと自分が頑張った量の違いだと私は考えました。どれだけそのことに真剣に向き合い、どれだけそのことに時間をかけ努力をしてきたのか。まだ努力する前であれば、「才能がある」という言葉は人をやる気にしてくれる魔法の言葉です。でも努力した人に対しての「才能がある」は、その人の努力を否定したことになるかもしれません。私は今回初めてここまで才能について深く考えました。才能とはなんなのか、才能と努力はどう見極めたらいいのか、でもきつと見極める、見極めないなどの問題

ではなく、才能に努力はいつでもついて回るんだと思います。見つけた才能を開花させ自分が胸を張って得意だといえるものにするまでには努力が必要なんです。だから運動や楽器、勉強など何にしても上手くできている人達に、努力抜きで才能だけの人はこの世の中には絶対いません。その人たちの才能は才能ではなく弛まぬ努力の結晶なんです。きっと「才能がある」と言ってくれている人には悪気はないし、努力というものは見えないものなので、才能と勘違いされてしまうのも仕方がないことだと思います。でも人がゼロから始めて頑張ってきたこと、私にとつての、フルートやダンスは自分でコツコツ練習したり、たくさん本番を経験したりして、やっと上手くできるようになったことです。それをもととの才能だと決めつけてしまい、本当に悪気がなく単なる褒め言葉として言ってくれている人がたくさんいます。それはとても悲しいことです。人の表面に見えている事実だけでなく、その人がなぜそれができるようになったのか、どうやってできるようになったのかという裏側を見通すことが大切なのだと思います。だからここまで私の話を聞いてくださったみなさんには、人が上手くできていることの裏には必ず努力があるということを中心に留めておいていただきたいと思います。



奨励賞

大空をはばたくカブトムシのよこに

大崎第一地区

日野学園

九年

河村 理莉子



私は今、カブトムシを六匹飼っています。弟がこの夏、はとこからもらってきたのです。はとこはこのカブトムシたちを卵から成虫になるまで育ててきました。生まれてからこれまで、彼らは天敵もいないうえ、おいしい昆虫ゼリーを食べることができ、この上なく贅沢で安全な環境で生活しています。

しかし果たして、昆虫ゼリーはおいしいのでしょうか。天敵がないことは、カブトムシにとって幸せなのかでしょうか。カブトムシは樹液の方がおいしいと感じるかもしれません。贅沢と思っているのは人間だけかもしれません。そもそも、弱肉強食の自然界では、天敵がいて当たり前なのです。本来なら、うっそうとした森に住み、入道雲が浮かんだ青く広々とした空の下を自由な身

で飛ぶことができるのです。

ところが、私の家に住む六匹は飛ぼうとしても、すぐに低い天井に当たってひっくり返ってしまいます。そして、ずっと六本の足をじたばたと動かし続けています。人間に育てられるというのは、自分のことでさえ自分でできなくなるということです。一方で、外で生きるカブトムシは自分の意志で自分のやりたいことができるのです。それこそが、生きる意味なのではないかと私は思います。我が家の六匹が幸せかどうかを私が決めることはできません。不幸ではないと思いたいですが、それでもやはり目の前にいるカブトムシがそれらしい一生を送っているには見えないのです。

これを中学生に置き換えて考えてみました。私たち中学生が大人になったときに同じことが言えると思います。現在中学生である私たちは、世間では子どもという立場で、大人である親にお世話になり、養ってもらっています。それは、人間の世界ではごく自然なことですが、しかし、もし数年後、私たちが成人した後、いつまでも親の保護下で助けてもらいながら生活するとしたらどうでしょうか。安全で楽かもしれませんが、それはいわば、自由のない飼われたカブトムシと同じで、生き甲斐のないつまらない人生だとは思いませんか。樹液を探して長距離を飛ぶことになっても、餌場でスズメバチと縄張り

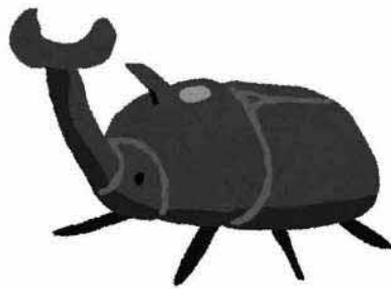
争いをしたとしても、鳥に追いかけて食べられそうになっても、私は飼われたカブトムシよりも、外で自由に飛ぶことのできるカブトムシになりたいです。

自分で生きるといえるのは魅力的ではないでしょうか。人間として生きるとも自然界に生きるカブトムシと同じで簡単ではないでしょう。生きるために沢山働いたとしても、人間関係の中で、ゆずれないものをめぐって争うことになったとしても、事が上手く運ばなくて打ちひしがれたとしても、私は自由に生き甲斐のある人生を送りたいです。いずれは地に足をつけて自分の力で世界に羽ばたき生き抜くため、中学生の今、私たちは自立して生きていけるようになるための訓練をしているのだと思います。

中学生はまだまだ親の保護下で子どもとして制限されることが多くあります。しかし、その守られている期間というのは自分で餌場を探す力をつけるために、外敵にすぐ食べられず、自身を守る術を身につけるために必要な時間です。

今私が、苦手教科である数学を克服するためにかけている膨大な時間。吹奏楽部で八月のコンクールのたった七分の演奏に向けて一生懸命に練習した半年。最高の演奏をするために磨き上げた一音一音。最高学年として、運動会で素晴らしい出し物をするために積み重ねた努

力。そのすべては私が将来自分の力で生きるために役立つでしょう。だからこそ私は今、中学生としてやるべきことに一生懸命取り組み、力強い羽を身につけます。いずれは自由に飛び回ることが出来る魅力的なカブトムシになるために。



奨励賞

優しい世界



荏原第三地区

荏原平塚学園

九年

田中 美春
たなか みはる

最近、身近でよく聞く「バリアフリー」という言葉。皆さんはこの言葉を聞いて、何を思い浮かべるでしょうか。どのようなことを連想するかは人それぞれだと思います。スロープがついた建物や手すりが設置されているトイレなど、設備面での工夫を思い浮かべる人が多いかもしれません。しかし、本当の意味でのバリアフリーは、設備が整うことだけでなく、制度やサービスが充実することと、人々の意識が変わることによって完成すると私は考えます。

私は、小さい時からバリアフリーを身近に感じる、「助けられる側」でもありました。なぜなら、私の従姉妹たちが難病指定を受けている肢体不自由の障がい者だからです。車椅子なしでは生活できない彼女たちとずっと一

緒に過ごしてきました。不自由な生活の大変さを痛感する一方で、彼女たちは特別な存在ではないと思っています。

以前、従姉妹たちを運動会に招待しました。「みんなと同じように楽しんでほしい」と思ったからです。しかし、想像以上に彼女たちが注目されてしまい、かえって辛い思いをさせてしまったのではないかと心が痛みました。周りの人たちが、普段だとあまり見ることのない光景に驚く気持ちも共感できましたが、みんなの反応にショックを受け、傷つく自分がありました。私はその時、どんな人でもまずはお互いを知り、受け入れ合うことで、互いに心の壁がなくなり、真のバリアフリーの実現に一歩近づくと強く感じました。

あるテーマパークでは、車椅子利用者は列に並ばずアトラクションに乗れるサービスがあります。待ち時間を短縮できるのか、と誤解を受けることもあります。実際は受付時の待ち時間を別の場所で待機し、指定された時刻になるとアトラクションを体験できるというものです。このサービスは、みんなが平等に楽しむための工夫といえます。誰もが同じことを体験でき、共有できます。これも一つのバリアフリーなのです。

忘れてはいけないことは、バリアフリーは設備面での工夫だけでは完成しないということです。助けることは

特別なことではなく、自然と手を差し伸べられる、そんな社会が理想です。そのためには、自分と違う人がいるということを知り、理解することが大切です。色々な人がいることを知っていれば、困っているときに素通りするのではなく、寄り添えるかもしれません。バリアフリーはお互いを思いやる気持ちから生まれるものなのです。

街中で、車椅子や盲導犬の介助を受けている人のために自然と道を譲る光景や、自分にできることはないかと白杖をついている方にそっと手を差し伸べ、目的地まで一緒に歩いていく光景を見ると、私はとてもあたたかい気持ちになります。「助ける側」・「助けられる側」の関係だけではなく、人と人が自然に思いやれるのであれば、この世界は、だれもが幸せに生きていける、優しい世界になるはずです。

私は将来、どのような立場の人でも、「自分はここに居ていいんだ」と心から思える社会を作っていきたいです。そのために、まずは周りの人に優しく接することから始めていこうと思います。お年寄りの方や妊婦さん、小さい子が電車にいたら席を譲る、学校や地域で困っている人がいたら積極的に声をかける。こうした小さな行動を積み重ね、少しずつ身近な世界を変えていきたいです。優しい世界は必ず実現できる、私はそう信じています。



奨励賞

平和な世の中にするために

大崎第二地区

大崎中学校

八年

井 土 萌 音
い ど も ね



みなさんは、戦争について考えたことがありますか？

これから私が主張するのは、戦争についてです。ニュースなどで何かと耳にする戦争という言葉。最近では学校の授業でも習うことがあります。戦争について考えることは、決して楽しいことではありません。しかし、私は平和な世の中にするために、少しでも多くの人が戦争を知ることが大切だと感じているので、戦争について主張しようと思いました。

まずは、今の戦争の現状についてです。今世界では「世界戦争」などの大きな規模の戦争は起きていませんが、「紛争」や「内戦」などが世界各地で起きています。例えば、「ウクライナ侵攻」、「ガザ・イスラエル紛争」、「ミャンマー内戦」。「アフガニスタン紛争」など、他にも多くの戦争

が世界のあちこちで起きていて、罪のない人の命が、今、この瞬間にも奪われています。

そんな恐ろしい戦争が世界中で起きている中、昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞しました。日本被団協は日本全国の被爆者で構成される唯一の全国組織です。最初は、被爆者それぞれが個別に活動していたため、組織力が弱く、とても小さな団体でしたが、被爆者自身が体験を語り、核兵器廃絶を訴えることにより、その訴えに感銘を受ける人が多くなり、大きな団体となりました。そして、六十九年たった今も、世界中に核兵器の恐ろしさを伝えるために活動を続けています。

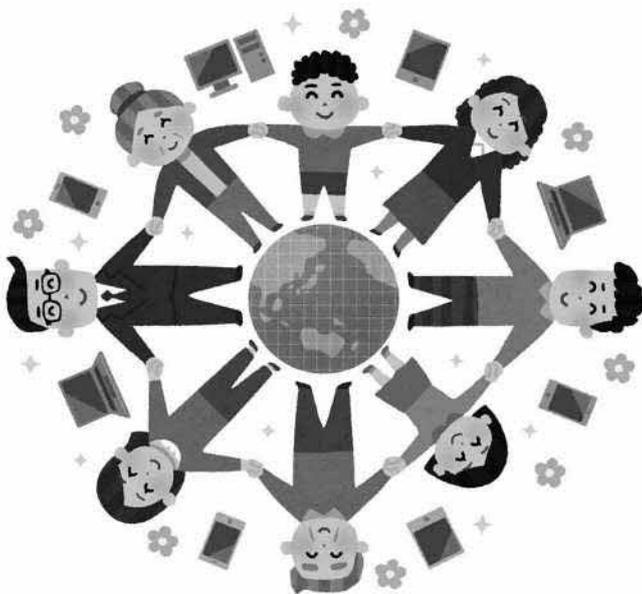
日本は世界で唯一の被爆国で、「持たず、作らず、持ち込ませず」という「非核三原則」という核兵器に関する基本理念を持っています。「持たず」とは核兵器を保有しないこと、「作らず」は核兵器を製造しないこと、「持ち込ませず」は外国からの核兵器の持ち込みを認めないというものです。身をもって、原爆の悲惨さを体験した唯一の国だからこそ、原爆がどれだけ恐ろしいものであったか、その恐ろしさや悲惨さを世界中に伝えることが大切なのです。つまり、日本は世界に核兵器を持つてはいけないということを伝えるべき立場なのです。

原爆を落とされた広島や長崎だけでなく、戦争で苦しんだ人々はたくさんいます。

私は、今年の夏、沖縄の「ひめゆり平和祈念資料館」に行きました。そして、そこで、第二次世界大戦での沖縄戦の恐ろしさを実感しました。それは、今まで何も知らなかった自分が恥ずかしくなるほど、とても過酷で、悲惨なものでした。そこでは、「ひめゆり学徒隊」の人たちが、日本軍の看護役として働いていたことを知りました。看護では、手術の補助や投薬、注射、食料や水の運搬など、衛生管理面では、うじ虫の除去までであり、言葉では言い表せないくらい、苦しく、辛い仕事であったようです。そんな過酷な状況と戦争が激化する中、私と同じくらいの歳の人たちが数多く命を落としました。わずか生き延びた人も、「生き残ってしまい、申し訳ない」という思いをずっと抱えて、罪の意識を持ち、生きていらっしやるのだそうです。そのことを知った時、戦争は決して過去のものではないのだと強く思いました。

過去の原爆や戦争のことを知るたびに、今の自分の生活が、いかに平和で幸せであるかを実感します。私が考える「平和」とは、家族や友達と笑い合っただけで過ごせる何気ない日常を送ることです。時代が進むにつれ、戦争を経験した人も減っていき、戦争や原爆のことを忘れる人も多くなってしまうのではないのでしょうか。しかし、私はすべての人に戦争や原爆のことを忘れないでほしいのです。私たちが普段送っている今の日常が、決して当た

り前ではないと知るためにも、一人一人が戦争に対し、関心を持ち、くわしく知り、次の世代へと伝えていくことが大事なのだと思います。自分は戦争とは無関係と誰もが思わず、「平和」を守り続けていく努力をすること、そして、「戦争とは恐ろしく、悲惨なこと」そのことを少しでも多くの人に伝えることが、私たちができる平和な世の中への第一歩かもしれません。



奨励賞

勉強するということ

品川第一地区

品川学園

九年

藤村

和



中学校生活最後の夏休み。私を待ち受けていたのは受験勉強だ。残り半年まで迫った高校入試は、今まで漠然と遠いことのように感じていた自分の進路選択、そして何より、勉強に向き合う初めての機会だった。でも、勉強を特段楽しいと感じたことがない私には毎日何時間も机に向かうのは決して簡単なことではない。夏休み中は学校のように友達と話すことも少なく、ただひたすら問題と向き合う日々とうんざりした。私が頭に詰め込んでる知識は、将来本当に使う時が来るのだろうか。漫画や映画の登場人物のように、教科書を開くだけですべてが理解できたら楽だろうな、とくだらないことを考えたりもした。きっと私と同じようなことを考えた経験がある人は多いと思う。

でも、私はそんな風に考える時、いつも決まってる思い出すことがある。去年の夏、品川区平和使節派遣事業に参加して訪れた平和記念資料館で、私は一枚の写真に出会った。辺り一面に広がる焼け野原と高く積もった瓦礫の山、壊れた建物のそばに集まる大勢の子供たち。原爆が投下された少し後の広島だ。原爆で多くの学校が倒壊した広島では、先生や生徒たちが学校の跡地に集まって、授業を再開したという。校舎がない中、青空の下で勉強するこの光景は「青空教室」と呼ばれているらしい。着ているポロポロの服とは対照的に、子供たちがみんな晴れやかな顔をしていることが私の中で強く印象に残った。壮絶な境遇を感じさせないくらいに彼らの表情は喜びに満ち溢れている。それは、白黒の写真越しでも十分に伝わってきた。きっと学校が再開したことが嬉しくてたまらないのだと思う。

この時私は、勉強ができる環境にいることは決して普通ではないのだ、ということに初めて気付かされた。現代の日本に生きる私たちにとって、学校に通って教育を受けるのはごく当たり前のことだ。でも、当たり前だと思える環境自体が私たちが想像する以上に貴重なものかもしれない。私たちは青空教室の子供たちのように、理不尽に勉強の機会を奪われる心配もない。勉強をしたくないと思えるのは、教育環境が整えられた社会で過ごして

いる証拠なのだ。

忘れてはならないのは、世界には今この瞬間にも教育を受けられない子供たちが大勢いるということだ。イスラエルとパレスチナの紛争など、今なお、世界各地で紛争や戦争にさらされている地域には、勉強の機会を奪われた子供たちが多くいる。発展途上国では性別や経済的な事情で全員が学校に通えないことも決して珍しくはない。他の国と比べても、日本の学校に通う私たちは本当に恵まれた立場にいるのではないだろうか。当たり前になっっているから普段意識する機会がないだけだ。

私のように毎日の勉強を煩わしいと感じているあなたに、私はこのことを伝えたい。勉強するということは、ただ教科書の内容を覚えるだけではない。生きていくために必要な知識を得るということでもあると思う。私たちは生まれながらにしてそれができる立場にいる。きちんと教育を受けられる環境が整っていて、勉強を教えてくれる先生たちや一緒に学ぶ友達がいる。それがどれだけ貴重なことかを知ったから、私は、勉強なんてやめてしまいたいと感じることがあっても、学ぶことを諦めないようにしたい。



奨励賞

「法」と「倫理」の狭間で

大井第一地区

浜川中学校

九年

坪内彩華

憑中

私は国語の授業で森鷗外の『高瀬舟』を読んで、正しさや善悪の概念は、常に一定しているものではないと感じた。善悪の判断基準は、状況や立場、そして人によって容易に変化する。しかし多くの人は、自分の中にある善悪の判断基準を十分に客観視することなく、外の出来事にも当てはめてしまいがちである。私自身も例外ではない。

たとえば次のような状況を考えたい。Bさんが「自分の命を終わらせてほしい」とAさんに頼み、Aさんがそれを実行したとする。その行為を単純に「悪い」と判断してよいのだろうか。私は一概に「悪い」とは言えない場合もあると思う。一方で、法律から見ればこれは殺人であり、許されない行為だ。倫理的な視点も交えて見た

時と、法の観点のみで見た時とでは、必ずしも判決が一致しない。これが『高瀬舟』が暗に問いかけてきている疑問の核心と重なる。

基準があり揺らぐことのない「法律」と、人間の情も交えたいわば臨機応変が通用する「倫理」との差異は、ただの理屈の違いで済ませられることではない。私たちの社会生活に直接影響を及ぼすこともある身近な問題なのだ。『高瀬舟』では、当事者である喜助の事情や心情が語られることで聞き手の感情が揺さぶられ、一定の基準によって決められた機械的な判断がためらわれる場面が何度も出てくる。森鷗外はそこに、人間というものの複雑さを表したのだ。

これを踏まえて、私たちは「法律」と「倫理」の両方を尊重する視点をもつことが重要だと考える。法律は社会の秩序を守るために必要なものだが、個人に配慮する人間的な判断も同じく必要なのだ。どちらかに偏って判断するのではなく、両立をはかることが、より公正で思いやりのある社会につながると私は考える。

最近、社会の大きな問題として「延命治療」や「安楽死」についての議論を目にすることがある。最初に私は、人の命を意図的に終わらせるのは悪いことだと単純に思った。しかし、患者本人や家族の苦勞を思えば、苦しみを終わらせることも一つの「善」なのではないかと

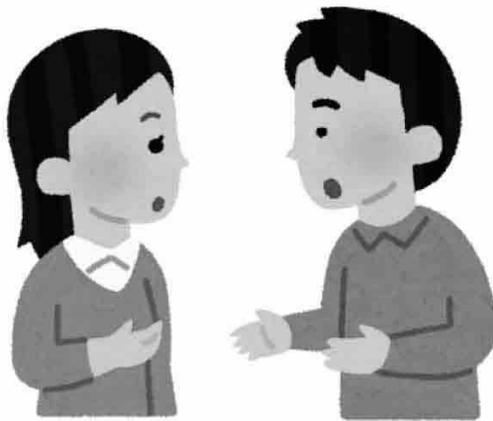
考えさせられた。現行の日本の法律では人の命を意図的に終わらせることは認められていない。安楽死の是非をめぐる議論は絶えず行われているが、未だ「正しい答え」というものは出ていない。

『高瀬舟』での喜助の選択は、現代ですら白黒つけることができない難しいものだったと思う。しかしこの作品の中では、喜助の選択は「悪」と見なされてしまう。

これまで述べたことから、他人を評価する際は表面的な事実だけで結論を出さないことが大切だと考えた。異なる立場から物事を考える態度は、『高瀬舟』が示している「人としての在り方」だと思うからだ。また「法律」と「倫理」の両方を尊重し、両者のせめぎあいの中で一番良い方法を模索する姿勢も大切だ。

私はこの作品を通して、他人を評価するときには表面的な事実だけで即断してはならないと学んだ。大切なのは、背景や事情を想像し、多角的に物事を捉えることだ。善悪の基準は一つに定まらず立場や状況で揺れ動くからこそ、判断の際には慎重であるべきなのだ。

私はこれからも多くの視点を取り入れながら、妥当で人間らしい判断を目指していきたい。自分の価値観を見直し、より良い個人であろうとする姿勢が、より良い社会を作ることにつながっていくと思う。



講評

審査員長 江森 利公

(元東邦音楽大学特任准教授)

審査は大変難航いたしました。粒よりなご発表ばかりだったからです。どうやって差をつければ良いのかということを考えざるを得ない大会でした。皆さんのご発表はそれぞれ良いところがあつて、時間内で比較検討することが大変難しかったことを申し添えておきます。今年も数多くの素敵なご発表に出合えることができて、大変嬉しく思っております。まず、それぞれのご発表について、誠に簡単ではございますが、お一人ずつコメントをさせていただきます。

【個人】

1. 戸越台中学校 伊藤 ころろさん

品川区の支援制度と物を大切にする事の両立について、身近な具体例を挙げながら現実的な提案をされたところが良かったです。一番目のご発表で緊張されたと思いますが、堂々としたお話ぶりでした。

2. 東海中学校 中間 ありささん

身近に潜んでいるフェイクニュースとその影響について考え、情報を正しく判断し効果的に活用するためにも、自分の頭でしっかりと考え、確かめるということが大事だというご主張でした。はっきりとした口調で自信を持って話す姿は頼もしいものでした。

3. 荏原第六中学校 白石 枝真さん

高齢者の孤独死の問題を取り上げ、人はいくつになっても人と関わり、新しいことにチャレンジしていくことが大切だと結論づけました。当事者として考え、行動していきたいという枝真さんのご主張には説得力がありました。

4. 富士見台中学校 上西園 彩咲さん

彩咲さんは、新体操の選手として国際大会に参加し、戦争を身近に感じる体験をいくつもしました。そして、自分たちが今できることは戦争をしつかり理解すること、感謝の気持ちを忘れずに毎日を過ごすことだと気づきます。新体操の選手としての経験は、彩咲さんの視野を広げ大きく成長させたようです。淡々とした話しぶりの中にも臨場感があり、不安と恐ろしさがひしひしと伝わってくるお話ぶりでした。

5. 荏原第一中学校 桑谷 小春さん

小春さんは、身近な体験から知らないことで生まれる心の壁、見えないバリアがあることに気づきます。そして誰もが支えあえる社会の実現を目指して、心の壁を越えていこうと決意します。身振り手振りを添え、メリハリをつけた説得力のある話しぶりとお母さまの的確なアドバイスが印象的でした。

6. 豊葉の杜学園 柳田 和花奈さん

和花奈さんは、トイレは日本のおもてなし文化の極みではないかと考えます。次に使う人の身になって行動するという文化を大事にしていきましょうというご主張でした。身近な事例から日本の文化を考えたとご発表に聞き手の皆さんも思わず笑顔になったのではないかと思います。

7. 鈴ヶ森中学校 松田 琴恋さん

聞こえの不自由なお友達との出会いをきっかけに、聴覚障害について琴恋さんの理解が深まっていく過程がよく分かるご発表でした。伝え方を工夫することで、多くの人と心を通わせられるようになりたいというメッセージが心に残りました。今年ではデフリンピックが十一月に行われました。品川区が会場の一つになっ

たことは忘れられないことです。タイムリーな話題になっていました。

8. 荏原第五中学校 高橋 愛理さん

愛理さんはお祖父さまの死をきっかけに、数々の思い出とともに、これからの生き方について考えます。そして、誰かのために自分ができることをしていこうと決意を述べます。優しい人柄のこもったご発表でした。

9. 八潮学園 菊地 はなさん

はなさんは、才能について、ご自分の体験をもとに考えを深めていきます。そして才能には、たゆまぬ努力の裏付けがあつて初めて花開くのだと気づきます。表面に出ていることの裏面を見通すことを大切にしたいというご主張でした。はなさんの素直な気持ちがよく伝わってくるご発表でした。

10. 日野学園 河村 理莉子さん

家で飼っているカブトムシの様子を見ながら、自分の生き方について真剣に考えたことを述べるご発表でした。困難に出会ったとしても、大空を自由に飛ぶカブトムシになれるよう、自分で生きるための力をつけ

ていきたいという、理莉子さんの前向きな気持ちが伝わってきました。

持てました。

11. 荏原平塚学園 田中 美春さん

本場のバリアフリーは設備面だけではなく、人々の意識が伴うことで初めて完成するという美春さんの考えを述べることから始まりました。誰にとっても、生きていく上で優しい世界を実現していきたいという美春さんの熱い願いが伝わるところで発表でした。

14. 品川学園 藤村 和さん

和さんは受験勉強を機に、改めて、勉強できる環境の貴重さを考えていきます。そして、勉強できる環境の貴重さに気づくとともに、これからも学ぶことを続けていこうと強く思います。広島市の平和記念資料館の一枚の写真が、聞き手にも目に浮かぶような、丁寧なお話しぶりでした。会場全体を見渡ししながら、表情豊かに話してくださいました。

12. 大崎中学校 井土 萌音さん

戦争について多くの人が関心をもち、その恐ろしさを伝えていくことが大切だというご主張でした。考えの根底にあることを熱い思いを込めて発表してくれました。沖縄のひめゆり平和記念資料館での見聞は、萌音さんの考えを深める大きな転機になりました。優しい語り方の中に強さを感じました。

15. 浜川中学校 坪内 彩華さん

彩華さんは善悪の判断基準について、高瀬舟の授業をきっかけに考えを深めていきます。そして、表面的な事実だけで即断せず、多角的に物事をとらえ、慎重に判断することで、よりよい社会の実現に努めたいというご主張でした。淡々としたお話しぶりの中に彩華さんの誠実な人柄が伝わってくるご発表でした。

13. 伊藤学園 市川 幸之介さん

変化を恐れず挑戦することで、新しい自分を生み出すことができた幸之介さん。身近に起きた二つの体験を気持ちの変化とともに正直に発表されました。緊張の中にもはきはきと力強く、笑顔で話す様子に好感が

【全体】

お一人お一人の発表の中で、自分の考えをはっきりと伝えていこうという強い意欲が感じられて、素晴らしい主張大会になったと思います。中学生の皆さんが今後も

このように、自分の頭で考え活躍していただけることを大変嬉しく思っております。素敵な発表の内容について、三点申し上げます。一つ目は、普段の生活を見直し身近な体験から考えを深め、自分なりの視点でテーマを選び、内容を構成した上で、しっかりと発表してまいりました。その際、自分の思いや考えを支えるのにふさわしいエピソードの選択がされており、見事でした。皆さんの論理的な思考力の育ちを感じさせられました。二つ目は、自分の思いや考えを実現していくために、自分はこうしていくという具体的な行動に加え、その行動を未来へどのようにつないでいくかという発表をしているところに素晴らしさを感じました。これから先、生きていく力が着実に育っていることを実感しました。三つ目は、思春期に揺れる思いを正直に語るだけでなく、聞き手にわかりやすい言葉を選び表情豊かに力強く話されている様子に大変感動しました。間の取り方も見事でした。よく練習されて来ているのだろうなということを感じさせる瞬間でした。練習は、新鮮さや伝える力を弱めてしまうことでもありますので留意したいところです。

全体として、自分で課題を見つけ、自分なりの具体的な解決策を提示し、自ら行動していくという主体的な生き方が垣間見えて、大変頼もしく思えました。

最後になりましたが、中学生の皆さんがこのように深

い考えを持ち主張発表され、会場の皆様に共感や感動を与えたのは、ご家族や先生方との温かい触れ合いがあったからだと思います。本日はこのような素晴らしい発表の数々をありがとうございます。大会を開催していただきました、品川区青少年対策地区委員会連合会の皆様をはじめ、関係者の皆様に改めて感謝と敬意を表しまして、わたくしの講評とさせていただきます。ありがとうございます。



○前回までの三賞受賞者

●平成12年度（第一回）平成12年12月2日・荇原文化センター

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	支え合って、生きるために	荇原第二中学校	2年	塚田 まなみ
優秀賞	私たちができること	富士見台中学校	3年	浅井 裕子
//	学校・親・地域と生徒	鈴ヶ森中学校	3年	岩崎 良輔

●平成13年度（第二回）平成13年12月1日・きゅりあん

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	地域のために、私のために	荇原第六中学校	3年	峰 知子
優秀賞	地域のなかで生きる	日野中学校	2年	小川 航
//	地域ボランティアを経験して学んだこと	東海中学校	2年	播摩 瞳
審査員特別賞	地域と私のかかわり	富士見台中学校	3年	大竹 菜津美

●平成14年度（第三回）平成14年12月7日・荇原文化センター

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	地域の人々とのつながり	浜川中学校	3年	柳澤 志保
優秀賞	レッツ！ボランティア	荇原第一中学校	3年	高橋 南美
//	ボランティアを通じて	富士見台中学校	3年	和田 瑠美子
審査員特別賞	僕の「故郷」－八潮	八潮南中学校	3年	坪田 光司

●平成15年度（第四回）平成15年12月6日・きゅりあん

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	さあ、みんなでボランティアを	荇原第六中学校	3年	梁川 美枝
優秀賞	生徒会として地域にできること	平塚中学校	3年	森口 諒
//	僕らにできること	八潮中学校	3年	高野 真之
審査員特別賞	ボランティアと私	富士見台中学校	3年	大竹 美里

●平成16年度（第五回）平成16年12月4日・荇原文化センター

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	あいさつをしよう	荇原第六中学校	3年	堀尾 りえ
優秀賞	ボランティアに挑戦	荇原第五中学校	2年	中野 美憂
//	地域とのつながり	鈴ヶ森中学校	3年	渡辺 奈津子
//	「五反田の夏」	日野中学校	9(3)年	内山 洋輔
審査員特別賞	地域の皆さんの励まして	東海中学校	3年	杉本 育美
//	二期の生徒会活動を通じて	富士見台中学校	3年	太田 英子

●平成17年度（第六回）平成17年12月3日・きゅりあん

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	いじめ	荇原第四中学校	3年	横部 美穂
優秀賞	笑顔で地域づくり	八潮中学校	3年	小林 理沙
//	現代社会に必要なもの－あなたはもっていますか－	荇原第二中学校	2年	曲師 夕貴
//	ジュニアリーダー教室で学んだこと	伊藤中学校	9(3)年	伊藤 泉
審査員特別賞	日本に来て感じたこと学んだこと	日野中学校	9(3)年	江スレイRコンフェリド
//	ボランティア活動で成長しよう	荇原第五中学校	3年	広瀬 可奈

●平成18年度（第七回）平成18年12月2日・荇原文化センター

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	教育を受ける権利をもつ私たち	戸越台中学校	9年	豊田 紘子
優秀賞	Cooperation	城南中学校	9年	斎藤 琴音
//	今、私たちに出来る事	大崎中学校	8年	木村 ゆう
//	Let's Think About The Earth	平塚中学校	9年	鷹見 彩
審査員特別賞	命	伊藤中学校	9年	尾形 大生
//	班長を経験して	荇原第六中学校	8年	小林 旺世

●平成19年度（第八回）平成19年12月1日・きゅりあん

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	私の母校	平塚中学校	9年	木山 友貴
優秀賞	嘘	日野学園	9年	中島 深代佳
//	思いやり	荇原第六中学校	8年	溝口 斐狩
//	今の私たちにできること	戸越台中学校	9年	川田 知佳
審査員特別賞	一生一組から	八潮南中学校	9年	仲妻 みゆき
//	地球温暖化と私	八潮中学校	8年	秋山 豊人

●平成20年度（第九回）平成20年12月6日・荇原文化センター

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	「命の輝き」	東海中学校	8年	篠原 優海
優秀賞	人生最大の体験	荇原第四中学校	9年	池田 隼人
//	自分対自分	戸越台中学校	9年	青菅 美咲
審査員特別賞	私の学校	荇原平塚中学校	8年	肥沼 佑依

●平成21年度（第十回）平成21年12月5日・きゅりあん

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	ユニセフリーダー講座に行って	富士見台中学校	9年	林 昴玟
優秀賞	じいちゃん的笑顔	城南中学校	9年	白石 陽香
//	将来の夢	浜川中学校	8年	相樂 滯
審査員特別賞	道しるべ	荇原第三中学校	9年	大瀧 夢乃

●平成22年度（第11回）平成22年12月4日・荇原文化センター

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	つながりの大切さ	荇原第一中学校	9年	松尾 江里香
優秀賞	いのちのバトンをつなぐ	伊藤学園	9年	山森 明子
//	いじめをなくす一歩	鈴ヶ森中学校	9年	木村 賢幸
審査員特別賞	越えたい背中	城南中学校	9年	畠山 翔

●平成23年度（第12回）平成23年12月3日・きゅりあん

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	震災の募金を通して気付いた本当のボランティア	荇原第六中学校	9年	川崎 誠士
優秀賞	差別の気持ち、ありませんか	富士見台中学校	7年	川村 さくら
審査員特別賞	あきらめない心	浜川中学校	9年	河出 奈都美

●平成24年度（第13回）平成24年12月8日・荇原文化センター

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	言葉の暴力	東海中学校	8年	岡本 華穂
優秀賞	出会いは人を変える	富士見台中学校	9年	菅谷 日南子
//	今を生きる私たち	鈴ヶ森中学校	9年	鈴木 康平
審査員特別賞	日本国憲法の権利と責任について	荇原第五中学校	9年	博田 そら

●平成25年度（第14回）平成25年12月14日・スクエア荇原

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	あの日から	品川学園	8年	渡来 由麻
優秀賞	自分らしい自分になるために	鈴ヶ森中学校	9年	小栗 沙樹
//	平和を考えた夏	東海中学校	8年	中岡 悠空
審査員特別賞	言葉で伝える	荇原第六中学校	9年	米澤 友梨子

●平成26年度（第15回）平成26年12月13日・きゅりあん

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	故郷	東海中学校	8年	金崎 優樹
優秀賞	世界のマナーとわたし	豊葉の杜学園	9年	松村 美結
//	教育のありがたみ	富士見台中学校	9年	細木 優佳
審査員特別賞	言葉	日野学園	9年	大輪 ひよか

●平成27年度（第16回）平成27年12月12日・スクエア荇原

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	今私たちができること	鈴ヶ森中学校	9年	藏 慧子
優秀賞	声	品川学園	9年	岩田 ゆう奈
//	中学生から見た社会	伊藤学園	9年	竹内 翔吾
審査員特別賞	自分に自信を持つこと	日野学園	9年	島 優香里

●平成28年度（第17回）平成28年12月10日・きゅりあん

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	共に生きる社会を目指して	大崎中学校	8年	種部 夏実
優秀賞	携帯電話の使用について	伊藤学園	9年	保野 百合子
//	未来を弾く	品川学園	9年	上村 正利
審査員特別賞	孤独死から変える未来	鈴ヶ森中学校	9年	野村 光里

●平成29年度（第18回）平成29年12月9日・スクエア荏原

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	見えない心の傷	荏原第一中学校	9年	高地 七星
優秀賞	話せなくても	品川学園	9年	矢田堀 成実
//	思い込みの重さ	大崎中学校	8年	加茂 詩音
審査員特別賞	自分も相手も傷つけないために	鈴ヶ森中学校	9年	古屋 心織

●平成30年度（第19回）平成30年12月8日・スクエア荏原

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	ひとりじゃない	荏原第六中学校	9年	緒方 紫麻
優秀賞	『一九八四年』から考える私達の自由	品川学園	9年	石川 睦月
//	男女平等	豊葉の杜学園	9年	飯寄 瑚子
審査員特別賞	気持ちを人に伝えるには	伊藤学園	9年	富永 夏々子

●令和元年度（第20回）令和元年12月14日・立正大学 品川キャンパス 石橋湛山記念講堂

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	少しの勇気で助け合い	荏原第五中学校	8年	川端 あかり
優秀賞	乗り越えてはいけないけど	戸越台中学校	8年	岸村 帆菜
//	「個性」とは	日野学園	9年	石川 真由香
審査員特別賞	頂上を目指して	荏原第六中学校	9年	栃谷 好香

●令和3年度（第21回）令和3年12月11日・スクエア荏原

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	争うこと	荏原第六中学校	9年	高瀬 結空
優秀賞	自分から	荏原平塚学園	9年	鈴木 絢音
//	生きてるだけで社会貢献	八潮学園	8年	丹 つぐみ
審査員特別賞	緊張しても大丈夫	富士見台中学校	9年	袖山 鈴菜

●令和4年度（第22回）令和4年12月10日・スクエア荏原

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	助ける	荏原第六中学校	9年	今井 莉央
優秀賞	理解	荏原第一中学校	9年	松浦 夢彩
審査員特別賞	一言多く	八潮学園	8年	白石 結菜

●令和5年度（第23回）令和5年12月9日・スクエア荏原

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	描き続ける	鈴ヶ森中学校	9年	白倉 帆乃佳
優秀賞	悩みの先に見えるもの	品川学園	9年	國分 槻
//	真剣だからこそ、守れる命	豊葉の杜学園	9年	関 珠璃
審査員特別賞	私の挑戦	戸越台中学校	8年	宮澤 星怜

●令和6年度（第24回）令和6年12月14日・スクエア荏原

賞	発表題名	学校	学年	氏名
最優秀賞	真の多様性とは	日野学園	9年	坂本 美心華
優秀賞	命より大事な情報って何ですか？	東海中学校	8年	田島 華乃
//	今、京都に何が起きているのか	荏原第六中学校	9年	三浦 慶太
//	私の中の変化	荏原第一中学校	9年	伊藤 優里
審査員特別賞	人を幸せにするもの	豊葉の杜学園	9年	櫻井 悠真

○第25回中学生の主張大会司会者

品川学園	9年	尾形 美優
品川学園	9年	村野井 怜奈
富士見台中学校	8年	田才 くるみ
富士見台中学校	8年	梅田 淳之介

○第25回中学生の主張大会審査員

(審査員長) 元東邦音楽大学特任准教授	江森 利公
品川区立中学校PTA連合会代表	松坂 寛之
品川区教育委員会事務局教育総合支援センター指導主事	根本 俊吾
品川区青少年対策地区委員会連合会代表	根岸 輝行
品川区青少年対策地区委員会連合会代表	近野 千力子

品川区民憲章

制定 昭和五十七年十月一日
(一九八二年)

品川区は、東に東京湾を擁し、西にはるか富士を望み、国際都市東京の表玄関に位して、江戸の昔から交易の拠点となり、我が国文化と産業の発祥地として、あまねく都民の心のふるさとであります。

わたくしたちは、この輝かしい歴史と伝統を誇りとし、文化の香り豊かな近代都市への発展を目指して、ここに区民憲章を制定いたします。

- 一、わたくしたちは、自由と平等を基本理念として、住民自治を確立し、進んで区政に参加します。
- 一、わたくしたちは、心の触れ合いを大切にして、互いに人権を尊重し、人間性豊かな環境をつくります。
- 一、わたくしたちは、古きよき歴史と伝統を守り、さらに生活文化を発展させ、これを後世に伝えます。
- 一、わたくしたちは、自然を大切にして、生活との調和をはかり、健康で豊かな区民生活を目指します。
- 一、わたくしたちは、自立と連帯の精神に支えられた、思いやりと生きがいのある地域社会をつくります。

憲章制定の経過と形態

「品川区民憲章」は、昭和五十六年十二月三日発足した品川区民憲章制定委員会（会長 沖邑品吉氏 委員数二十名）が区長の諮問を受け、延べ十二回の会議を持ち、昭和五十七年五月十七日、「品川区民憲章案」として答申されました。区では、答申の内容を慎重検討の結果、内容的にも、作成過程なども適切であると判断し、答申通り区の憲章とすることに決定しました。

また区では、名実ともに区民の総意による憲章とするため、昭和五十七年第二回東京都品川区議会定例会に付議し、去る七月六日、「品川区民憲章」として議決されました。

憲章は、前文と五項目の本文からなり、前文では、歴史と伝統に輝く、品川区の位置と誇りを示し、文化の香り豊かな近代都市への発展を目指す決意をうたっており、本文の五項目は、制定の目的を達成するための区民の心構えが具体的に述べられています。



司会者 (品川学園)



司会者 (富士見台中学校)



発表



発表



発表



発表



発表



審査員長講評



令和8年3月

品川区青少年対策地区委員会連合会
(事務局) 〒140-8715 品川区広町2-1-36
品川区地域振興部地域活動課
地域支援係 TEL 03-5742-6690